

## 第 5 章

# Hodge 作用素と Laplacian

### 5.1 内積と随伴

#### 5.1.1 内積

##### 公理 5.1: 内積の公理

実数体  $\mathbb{R}$  上の  $n$  次元ベクトル空間  $V$  に対して,  $g: V \times V \rightarrow \mathbb{R}$  は

- (I1)  $g$  は双線型写像である
- (I2)  $g(v, w) = g(w, v)$
- (I3)  $g(v, v) \geq 0$  かつ等号成立は  $v = 0$  のときのみ.

を満たすとき, (正定値) **内積** (inner product) と呼ばれる.

双線型写像

$$\langle \cdot, \cdot \rangle: V^* \times V \rightarrow \mathbb{R}, (\omega, v) \mapsto \omega[v]$$

を**双対内積**と呼ぶことにする. 双対内積を使って, 与えられた  $\mathbb{R}$  上のベクトル空間  $V$  の上に内積  $g$  を構成することを考える.

双対ベクトル空間  $V^*$  もまたベクトル空間なので,  $\text{Hom}_{\mathbb{R}}(V, V^*)$  を考えることができる. ここで, 線型同型写像  $\flat \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(V, V^*)$  を一つとろう.  $\dim V = \dim V^* = n$  なので  $\flat \in \text{GL}(n, \mathbb{R})$  でもある. このとき, 写像

$$g: V \times V \rightarrow \mathbb{R}, (v, w) \mapsto \langle \flat(v), w \rangle \quad (5.1.1)$$

は明らかに双線型写像なので, 内積の公理 (I1) を満たす. この  $g$  が内積の公理 (I2), (I3) を満たすようにするにはどのような条件が必要だろうか.

ここで  $V, V^*$  の基底  $\{e_i\}, \{e^i\}$  をとり,  $v = v^i e_i, w = w^i e_i$  と成分表示する. テンソル積の構成に従うと  $g \in T_2^0(V)$  であるから,  $g$  の成分表示は  $g_{ij} e^i \otimes e^j$  である. このとき  $g(v, w)$  を計算すると

$$g(v, w) = g_{ij} (e^i \otimes e^j) [v^k e_k, w^l e_l] = g_{ij} e^i [v^k e_k] e^j [w^l e_l] = g_{ij} (v^k e^i [e_k]) (w^l e^j [e_l]) = g_{ij} v^i w^j. \quad (5.1.2)$$

が成り立つ.

- 公理 (I2) を満たすには,  $g_{ij}w^i v^j = g_{ij}w^j v^i$  でなくてはならない. したがって  $g_{ij} = g_{ji}$  である.
- 公理 (I3) を満たすには, 2 次形式  $g_{ij}v^i v^j$  が正定値でなくてはならない. i.e. 行列  $[g_{ij}]_{1 \leq i, j \leq n}$  は正定値である.

逆に内積  $g$  が与えられると, そこから同型写像  $\flat \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, V^*)$  の表現行列が自然に定まる<sup>\*1</sup>.  $\flat(v) = h_i e^i \in V^*$  とおくと式 (5.1.2) において

$$\begin{aligned} g(v, w) &= (g_{ij}v^i)w^j \\ &= \langle \flat(v), w \rangle = h_j w^j \end{aligned}$$

であるから,

$$h_i = g_{ij}v^j$$

となる. i.e.  $\flat$  の表現行列は  $(g_{ij})$  である.

以上の考察から,  $\mathbb{R}$  上のベクトル空間  $V$  に対して以下の事実が分かった:

$\flat \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(V, V^*)$  であってその表現行列  $[g_{ij}]$  が正定値対称行列であるような  $\flat$  が存在する  
 $\iff$  (正定値) 内積を定義できる

### 5.1.2 随伴

内積  $g$  の定まったベクトル空間  $V$  のことを**計量線型空間**と呼び,  $(V, g)$  と書く.

#### 定義 5.1: 随伴写像

二つの計量線型空間  $(V, g_V)$ ,  $(W, g_W)$  および線型写像  $f \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(V, W)$  を与える. 線型写像  $\tilde{f} \in \text{Hom}_{\mathbb{K}}(W, V)$  であって

$$g_W(w, f(v)) = g_V(v, \tilde{f}(w)), \quad \forall v \in V, \forall w \in W$$

が成り立つものを  $f$  の**随伴写像** (adjoint mapping) と呼ぶ.

## 5.2 Riemann 計量

<sup>\*1</sup>  $\flat$  の逆写像  $\flat^{-1}$  の存在は, 内積の公理 (I3) により保証されている.

### 定義 5.2: Riemann 多様体

$C^\infty$  多様体  $M$  を与える. 各点  $p \in M$  における接空間  $T_p M$  に正定値内積

$$g_p: T_p M \times T_p M \rightarrow \mathbb{R}$$

が与えられ,  $g = \{g_p \mid p \in M\}$  が  $(0, 2)$  型テンソル場を作るとき,  $g$  を  $M$  上の **Riemann 計量** (Riemannian metric) という. また, Riemann 計量の与えられた多様体を **Riemann 多様体** (Riemannian manifold) と呼ぶ.

$g_p$  が内積の公理 5.1-(I3) の代わりに

! (I3')  $\forall u \in T_p M$  に対して  $g_p(u, v) = 0 \implies v = 0$

を満たす (**非退化**; non-degenerate) とき,  $g$  を **擬 Riemann 計量** (pseudo-Riemannian metric) と呼ぶ.

チャート  $(U; x^\mu)$  に対する  $g_p$  の座標表示は

$$g_p = g_{\mu\nu}(p)(dx^\mu)_p \otimes (dx^\nu)_p$$

と書かれる. 内積の公理 5.1 より,  $g_{\mu\nu}(p)$  は正定値対称行列である.

一般相対性理論で使う計量テンソルの定義との対応を見ておく:

$dx^\mu \in \mathbb{R}$  を微小変位 (点  $p$  における 1-形式  $(dx^i)_p$  ではない) として  $dx^\mu \left( \frac{\partial}{\partial x^\mu} \right)_p \in T_p M$  のノルムをインターバル  $ds$  と見做すことで,

$$ds^2 = g_p \left[ dx^\mu \left( \frac{\partial}{\partial x^\mu} \right)_p, dx^\nu \left( \frac{\partial}{\partial x^\nu} \right)_p \right] = dx^\mu dx^\nu g_p \left[ \left( \frac{\partial}{\partial x^\mu} \right)_p, \left( \frac{\partial}{\partial x^\nu} \right)_p \right] = g_{\mu\nu} dx^\mu dx^\nu$$

を再現する.

行列  $(g_{\mu\nu})$  は対称行列なので, その固有値は全て実数である.  $g$  が Riemann 計量ならば全ての固有値は正であり, 擬 Riemann 計量ならば負のものが混ざることがある.

### 定義 5.3: 計量の指数, Lorentz 計量

行列  $(g_{\mu\nu})$  の固有値のうち正のものが  $i$  個, 負のものが  $j$  個であるとき, 対  $(i, j)$  を計量の**指数**という.  $j = 1$  ならば **Lorentz 計量** と呼ばれる.

## 5.3 $k$ -形式の内積

ベクトル空間  $V$  に内積  $g$  が定義されると, その双対ベクトル空間にも自然に内積  $G$  が定義される. また, 同型  $\wedge^1(V^*) \cong V^*$  を考えることで,  $V^*$  上の内積  $G$  を使って  $\wedge^k(V^*)$  上の内積を定義できる.  $\wedge^k(V^*)$  上に内積が定義されると,  $\wedge^k(V^*)$  の正規直交基底を考えることができる.

### 5.3.1 計量に誘導される同型写像

5.1.1から, 内積  $g_p$  の成分表示  $g_{\mu\nu}(p)$  は同型写像  $\flat \in \text{Hom}_{\mathbb{R}}(T_p M, T_p^* M)$  を誘導する:

$$\omega_\mu = g_{\mu\nu} v^\nu, \quad \forall v = v^\mu \left( \frac{\partial}{\partial x^\mu} \right)_p \in T_p M \quad (5.3.1)$$

! 逆写像  $\flat^{-1}$  は行列  $(g_{\mu\nu}(p))$  の逆行列  $(g^{\mu\nu})$  によって表現される.  $\forall \omega = \omega_\mu (dx^\mu)_p \in T_p^* M$  に対して

$$v^\mu = g^{\mu\nu} \omega_\nu \quad (5.3.2)$$

と作用する. 式 (5.3.1), (5.3.2) を合わせて添字の上げ下げと呼んだ.

上の注釈を代数的に議論する. 以下の議論は接空間に限らず一般の体  $\mathbb{K}$  上の計量線型空間に対して成り立つので,  $V = T_p M$  と書く.

まず, 線型写像  $\flat: V \rightarrow V^*$  を次のように構成する:

$$\flat(v)[w] := g(v, w), \quad \forall v, w \in V \quad (5.3.3)$$

#### 補題 5.1:

上で定義した  $\flat$  は線型写像である.

**証明**  $\forall v, v_1, v_2 \in T_p M, \forall \lambda \in \mathbb{R}$  をとる. 双対空間の演算規則により

$$\begin{aligned} \flat(v_1 + v_2)[w] &= g_p(v_1 + v_2, w) = g_p(v_1, w) + g_p(v_2, w) = \flat(v_1)[w] + \flat(v_2)[w] = (\flat(v_1) + \flat(v_2))[w] \\ \flat(\lambda v)[w] &= g_p(\lambda v, w) = \lambda g_p(v, w) = \lambda \flat(v)[w]. \end{aligned}$$

■

#### 補題 5.2:

$\flat: T_p M \rightarrow T_p^* M$  は同型写像である.

**証明** 内積の公理 (I3) と補題 5.1 より,  $\forall v_1, v_2 \in T_p M$  に対して

$$\begin{aligned} v_1 - v_2 \neq 0 &\implies (\flat(v_1) - \flat(v_2))[v_1 - v_2] = (\flat(v_1 - v_2))[v_1 - v_2] = g_p(v_1 - v_2, v_1 - v_2) > 0 \\ &\implies \flat(v_1) - \flat(v_2) \neq 0 \end{aligned}$$

i.e.  $\flat$  は単射である.  $\dim V = \dim V^*$  だから示された.

■

### 5.3.2 共役計量に誘導される同型写像

次に, 共役計量  $g^{\mu\nu}$  による「添字の上げ」を議論する.  $V$  の上に内積  $g$  が定まっているとき,  $V^*$  にも自然に内積  $G$  が定まる:

$$G: V^* \times V^* \rightarrow \mathbb{K}, (\omega, \eta) \mapsto g(\flat^{-1}(\omega), \flat^{-1}(\eta)) = \langle \omega, \flat^{-1}(\eta) \rangle \quad (5.3.4)$$

この定義の仕方は式 (5.1.1) に対応している.  $G \in T_0^2(V)$  であるから,  $V$  の基底  $\{e_\mu\}$  を使って

$$G = G^{\mu\nu} e_\mu \otimes e_\nu$$

と書ける.  $G^{\mu\nu} = g^{\mu\nu}$  ( $[g_{\mu\nu}]$  の逆行列) であることを確認する.

式 (5.3.3) に倣って線型写像  $\mathfrak{h}: V^* \rightarrow V^{**}$  を

$$\mathfrak{h}(\omega)[\eta] := G(\omega, \eta), \quad \forall \omega, \eta \in V^*$$

と定義すると,  $\mathfrak{h}$  は同型写像になる.  $\mathfrak{h}$  の  $\omega = \omega_\mu e^\mu \in V^*$  に対する作用を成分表示すると次のようになる:

$$\mathfrak{h}(\omega)[\eta] = G^{\mu\nu} \omega[e_\mu] \eta[e_\nu] = G^{\mu\nu} \omega_\mu \eta_\nu \quad (5.3.5)$$

ここで, 命題??より  $\dim V < \infty$  のとき

$$\begin{aligned} \varphi: V &\longrightarrow V^{**}, \\ v &\longmapsto (\omega \longmapsto \varphi(v)) \end{aligned}$$

は線型同型写像を成す. よって  $\sharp := \varphi^{-1} \circ \mathfrak{h}$  として線型写像  $\sharp: V^* \rightarrow V$  を定義すると,  $\sharp$  は同型写像になる. 式 (5.3.5) より

$$(\varphi \circ \sharp)(\omega)[\eta] = G^{\mu\nu} \omega_\mu \eta_\nu = \omega_\mu G^{\kappa\nu} \eta_\nu e^\mu[e_\kappa] = \omega[(G^{\kappa\nu} \eta_\nu) e_\kappa] = \varphi((G^{\kappa\nu} \eta_\nu) e_\kappa)[\omega]$$

であるから,

$$(\sharp \circ \flat)(v) = (G^{\kappa\nu} g_{\nu\lambda} v^\lambda) e_\kappa$$

がわかる. 定義 (5.3.4) より  $\sharp \circ \flat = \text{id}_V$  であるから,  $G^{\mu\nu} = g^{\mu\nu}$  とわかる.

ベクトル空間  $V$  上の内積

$$g = g_{\mu\nu} e^\mu \otimes e^\nu$$

が与えられたとき, 双対ベクトル空間  $V^*$  の内積  $G$  が

$$G = g^{\mu\nu} e_\mu \otimes e_\nu$$

として自然に定まる. このとき, 計量  $g, G$  から線型同型写像

$$\begin{aligned} \flat: V &\xrightarrow{\cong} V^*, \\ \flat(v)[w] &= g(v, w). \\ \sharp: V^* &\xrightarrow{\cong} V, \\ \sharp(\omega)[\eta] &= G(\omega, \eta) \end{aligned}$$

がそれぞれ自然に定まり,  $\sharp \circ \flat = \text{id}_V$  を充たす, i.e.  $\sharp = \flat^{-1}$  である.

### 5.3.3 $k$ -形式の内積

前節で述べた双対ベクトル空間  $V^*$  上の内積  $G$  によって,  $k$ -形式同士の内積を定義することができる.

まず, 命題??から  $\bigwedge^1(V^*) \cong V^*$  なので, 内積  $G: V^* \times V^* \rightarrow \mathbb{K}$  を  $G: \bigwedge^1(V^*) \times \bigwedge^1(V^*) \rightarrow \mathbb{K}$  と見做すことができる. これを 1-形式同士の内積として定義し,  $\forall \omega, \eta \in \bigwedge^1(V^*)$  に対して  $\langle \omega, \eta \rangle := G(\omega, \eta)$  と略記する.

! 双対内積  $\langle, \rangle: V^* \times V \rightarrow \mathbb{R}, (\omega, v) \mapsto \omega[v]$  との混同に注意せよ!!! 以降, 文脈上紛らわしいときは  $k$ -形式の内積を  $\langle, \rangle_k$  と書くことにする.

#### 定義 5.4: $k$ -形式の内積

$k$ -形式同士の内積  $\langle, \rangle: \bigwedge^k(V^*) \times \bigwedge^k(V^*) \rightarrow \mathbb{K}$  を  $\alpha_1 \wedge \cdots \wedge \alpha_k, \beta_1 \wedge \cdots \wedge \beta_k \in \bigwedge^k(V^*)$  の形をした元に対して

$$\langle \alpha_1 \wedge \cdots \wedge \alpha_k, \beta_1 \wedge \cdots \wedge \beta_k \rangle := \det(\langle \alpha_\mu, \beta_\nu \rangle)$$

と定義する.  $\bigwedge^k(V^*)$  全体に対しては, これを線型に拡張する. 違う型同士の内積  $\langle, \rangle$  は 0 と定義する.

#### 命題 5.1: $\bigwedge^k(V^*)$ の正規直交基底

$k$ -形式全体の集合  $\bigwedge^k(V^*)$  の上に定義 5.4 によって内積を定義する.

$\{e_i\}$  を  $V$  の正規直交基底,  $\{\theta^i\}$  をその双対基底とする. i.e.  $\theta^i[e_j] = \delta_j^i$ . このとき,

$$\{\theta^{i_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{i_k} \mid 1 \leq i_1 < \cdots < i_k \leq n\}$$

は正規直交基底である.

証明 まず,

$$\langle \theta^i, \theta^j \rangle = G(\theta^i, \theta^j) = (g^{\mu\nu} e_\mu \otimes e_\nu)[\theta^i, \theta^j] = \check{g}^{ij}$$

なので  $\{\theta^i\}$  は  $\bigwedge^k(V^*)$  の正規直交基底である. ゆえに

$$\langle \theta^{i_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{i_k}, \theta^{j_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{j_k} \rangle = \det(\langle \theta^{i_\mu}, \theta^{j_\nu} \rangle) = \det(\check{g}^{i_\mu j_\nu})$$

であり, 添字の集合  $\{i_\mu\}, \{j_\nu\}$  が集合として一致していなければ行列式の行/列で全て 0 のものが少なくとも 1 つ存在して 0 になる. 集合として一致している場合は, 添字の大小が指定されているので

$$\begin{aligned} & \langle \theta^{i_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{i_k}, \theta^{j_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{j_k} \rangle \\ &= \begin{vmatrix} \check{g}^{i_1 i_1} & & & \\ & \check{g}^{i_2 i_2} & & \\ & & \ddots & \\ & & & \check{g}^{i_k i_k} \end{vmatrix} \\ &= \prod_{\mu=1}^k \check{g}^{i_\mu i_\mu} = \pm 1 \end{aligned}$$

となる。

!

ここで定義した  $k$ -形式の内積は、多様体  $M$  の各点  $p$  における局所的なものである。  $\langle \omega_p, \eta_p \rangle$  が定義されたので、関数  $\langle \omega, \eta \rangle: M \rightarrow \mathbb{K}, p \mapsto \langle \omega_p, \eta_p \rangle$  を考えることができる。以下、  $\langle \omega, \eta \rangle$  と書いたらこのような意味を持つとする。

## 5.4 Hodge $\star$

$n$  次元  $C^\infty$  多様体  $M$  の各点  $p$  において  $\dim \bigwedge^k(T_p^*M) = \dim \bigwedge^{n-k}(T_p^*M)$  であった。従ってこれらは抽象ベクトル空間としては同型である。  $M$  に Riemann 計量が入っており、かつ向き付けられているならば、同型写像を自然に定めることができる。それが Hodge の  $\star$  作用素である。

### 定義 5.5: $\star$

$C^\infty$  多様体  $M$  は指数  $(i, j)$  の計量を持つとする。  $\theta^1, \dots, \theta^k, \theta^{k+1}, \dots, \theta^n \in T_p^*M$  を  $T_p^*M$  の任意の正の向きの正規直交基底とする。このとき、各点  $p \in M$  において線型写像  $\star$  を

$$\star(\theta^1 \wedge \dots \wedge \theta^k) := \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \theta^{k+1} \wedge \dots \wedge \theta^n$$

と定義する。特に  $k = 0, n$  のときにそれぞれ

$$\star 1 := \theta^1 \wedge \dots \wedge \theta^n, \quad \star(\theta^1 \wedge \dots \wedge \theta^n) := (-1)^j$$

である<sup>a</sup>。  $\star 1 \in \Omega^n(M)$  を  $M$  の**体積要素** (volume form) と呼び、  $\text{vol}_M$  と書く。

$\forall p \in M$  における上述の線型写像をあわせることで **Hodge の作用素**

$$\star: \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^{n-k}(M)$$

が定義される。

<sup>a</sup> 計量が正定値のとき、i.e.  $M$  が Riemann 多様体のときは  $j = 0$  で、青字で示した因子は常に 1 である。

定義 5.5 に従うと  $\star(\theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k})$  は、集合  $\{1, \dots, n\}$  の部分集合  $\{\mu_1, \dots, \mu_k\}$  の補集合を小さい方から順に並べた添字の集合  $\{\nu_1, \dots, \nu_{n-k} \mid 1 \leq \nu_1 < \cdots < \nu_{n-k} \leq n\}$  を得て

$$\star(\theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k}) = \text{sgn} \begin{pmatrix} 1 & \cdots & k & k+1 & \cdots & n \\ \mu_1 & \cdots & \mu_k & \nu_1 & \cdots & \nu_{n-k} \end{pmatrix} \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^{\mu_a}, \theta^{\mu_a} \rangle \right) \theta^{\nu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\nu_{n-k}}$$

として計算される。これは、Levi-Civita 記号と Einstein の規約を利用した

$$\frac{1}{(n-k)!} \langle \theta^{\mu_1}, \theta^{\nu_1} \rangle \cdots \langle \theta^{\mu_k}, \theta^{\nu_k} \rangle \epsilon_{\nu_1 \dots \nu_k \nu_{k+1} \dots \nu_n} \theta^{\nu_{k+1}} \wedge \cdots \wedge \theta^{\nu_n}$$

と等しい。いちいちこのように書くのは大変なので、Levi-Civita 記号の添字の上げを  $\dot{g}^{\mu\nu} := \langle \theta^\mu, \theta^\nu \rangle$  によって行い次のように略記する：

$$\epsilon^{\mu_1 \dots \mu_k}_{\nu_{k+1} \dots \nu_n} := \dot{g}^{\mu_1 \nu_1} \cdots \dot{g}^{\mu_k \nu_k} \epsilon_{\nu_1 \dots \nu_k \nu_{k+1} \dots \nu_n}$$

$\forall \omega \in \Omega^k(M)$  に対して  $\star \omega \in \Omega^{n-k}(M)$  が  $C^\infty$  級であることを確認する。そのために、正規直交基底によって  $\star \omega$  を成分表示する：

### 正規直交基底の構成

$M$  の正のチャート  $(U; x^\mu)$  をとる。  $\forall p \in M$  において、自然基底

$$X_\mu = \frac{\partial}{\partial x^\mu} \in \mathfrak{X}(M)$$

に Gram-Schmidt の直交化法を施す：

$$e_\mu := \frac{X_\mu - \sum_{\nu=1}^{\mu-1} g(X_\mu, e_\nu) e_\nu}{\left\| X_\mu - \sum_{\nu=1}^{\mu-1} g(X_\mu, e_\nu) e_\nu \right\|}$$

$\{e_\mu\}$  は  $U$  上の  $C^\infty$  ベクトル場であり、  $\forall p \in U$  において接空間  $T_p M$  の正規直交基底をなす。これを  $U$  上の正規直交標構 (orthogonal frame) と呼ぶ。

### 双対基底の構成

$\{\theta^\mu\}$  を  $\{e_\mu\}$  の双対基底とする。命題 5.1 より、これらは  $\forall p \in M$  において  $T_p^* M$  の正の正規直交基底をなす。

### 局所表示の対応

$\omega \in \Omega^k(M)$  が  $U$  上で

$$\omega = \omega_{\mu_1 \dots \mu_k} \theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k}$$

の局所表示を持つとする。このとき定義 5.5 から、各点  $p \in U$  において

$$\begin{aligned} \star \omega_p &= \omega_{\mu_1 \dots \mu_k}(p) \star(\theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k}) \\ &= \frac{1}{(n-k)!} \omega_{\mu_1 \mu_2 \dots \mu_k}(p) \epsilon^{\mu_1 \mu_2 \dots \mu_k}_{\nu_{k+1} \nu_{k+2} \dots \nu_n} \theta^{\nu_{k+1}} \wedge \cdots \wedge \theta^{\nu_n} \end{aligned}$$

である\*2。  $\omega_{\mu_1 \dots \mu_k}(p)$  が  $C^\infty$  関数なので  $\star \omega$  は  $C^\infty$  級である。

\*2 Einstein の規約により添字  $\nu_{k+1}, \nu_{k+2}, \dots, \nu_n$  に関しても和をとることになるので、添字  $\mu_1, \mu_2, \dots, \mu_k$  の組み合わせ一つにつき  $(n-k)!$  個の項が重複する。



**命題 5.2: 体積要素の表示**

$M$  のチャート  $(U; x^\mu)$  に対して以下が成立する：

$$\text{vol}_M = \sqrt{|\det(g_{\mu\nu})|} dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n$$

証明 別の正のチャート  $(V; y^\mu)$  をとる．このとき

$$\begin{aligned} dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n &= \frac{\partial x^1}{\partial y^{\nu_1}} dy^{\nu_1} \wedge \cdots \wedge \frac{\partial x^n}{\partial y^{\nu_n}} dy^{\nu_n} \\ &= \epsilon^{\nu_1 \cdots \nu_n} \frac{\partial x^1}{\partial y^{\nu_1}} \cdots \frac{\partial x^n}{\partial y^{\nu_n}} dy^1 \wedge \cdots \wedge dy^n \\ &= \det\left(\frac{\partial x^\mu}{\partial y^\nu}\right) dy^1 \wedge \cdots \wedge dy^n \end{aligned} \quad (5.4.1)$$

が成立する．一方， $g$  の  $y^\mu$  に関する局所表示を  $g'_{\mu\nu}$  とおくと

$$g_p = g_{\mu\nu} dx^\mu \otimes dx^\nu = g_{\mu\nu} \frac{\partial x^\mu}{\partial y^\kappa} \frac{\partial x^\nu}{\partial y^\lambda} dy^\kappa \otimes dy^\lambda = g'_{\kappa\lambda} dy^\kappa \otimes dy^\lambda$$

であるから

$$g'_{\kappa\lambda} = g_{\mu\nu} \frac{\partial x^\mu}{\partial y^\kappa} \frac{\partial x^\nu}{\partial y^\lambda}$$

である．両辺を行列と見做して行列式をとることで

$$\det(g'_{\kappa\lambda}) = \det(g_{\mu\nu}) \left( \det\left(\frac{\partial x^\mu}{\partial y^\nu}\right) \right)^2$$

とわかる．ゆえに式 (5.4.1) から

$$dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n = \sqrt{|\det(g'_{\kappa\lambda})| / |\det(g_{\mu\nu})|} dy^1 \wedge \cdots \wedge dy^n$$

である．ここで  $(V; y^\mu)$  として正規直交標構  $\{\theta^a\}$  に対応するチャートをとってあげれば<sup>\*3</sup>， $|\det(g'_{\kappa\lambda})| = 1$  であるので

$$\sqrt{|\det(g_{\mu\nu})|} dx^1 \wedge \cdots \wedge dx^n = \theta_1 \wedge \cdots \wedge \theta_n = \star 1 = \text{vol}_M$$

■

<sup>\*3</sup> 座標近傍は  $U$ ，座標変換が直交行列である．

**命題 5.3:  $\star$  の性質**

多様体  $M$  が指数  $(i, j)$  の計量を持つとする.  $\forall f, g \in C^\infty(M)$  と  $\forall \omega, \eta \in \Omega^k(M)$  に対して以下が成立する:

$$(1) \star(f\omega + g\eta) = f\star\omega + g\star\eta$$

$$(2) \star\star\omega = (-1)^{j+k(n-k)}\omega$$

$$(3) \omega \wedge \star\eta = \eta \wedge \star\omega = \langle \omega, \eta \rangle \text{vol}_M$$

$$(4) \star(\omega \wedge \star\eta) = \star(\eta \wedge \star\omega) = \langle \omega, \eta \rangle$$

$$(5) \langle \star\omega, \star\eta \rangle = (-1)^j \langle \omega, \eta \rangle$$

ただし,  $k$ -形式の内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  は定義 5.4 によるものとする.

**証明**  $M$  上の各点  $p$  において示せば良い.

(1)  $\bigwedge^k(V^*)$  は  $C^\infty(M)$ -加群なので, Hodge の作用素の定義から明かである.

(2)  $\{\theta^i\}$  を  $T_p^*M$  の正規直交標構とする. 命題 5.1 より,  $\omega_p = \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k$  の場合に示せば十分である.

$$\star\omega_p = \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \theta^{k+1} \wedge \cdots \wedge \theta^n$$

だから,

$$\begin{aligned} \star\star\omega_p &= \text{sgn} \begin{pmatrix} 1 & \cdots & n-k & n-k+1 & \cdots & n \\ k+1 & \cdots & n & 1 & \cdots & k \end{pmatrix} \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \left( \prod_{b=k+1}^n \langle \theta^b, \theta^b \rangle \right) \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k \\ &= \left( \prod_{a=1}^n \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) (-1)^{k(n-k)} \omega_p \\ &= (-1)^{j+k(n-k)} \omega_p \end{aligned}$$

(3) 線形性から  $\omega_p = \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k$ ,  $\eta_p = \theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k}$  の場合に示せば十分である.

$$\star(\theta^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\mu_k}) = \text{sgn} \begin{pmatrix} 1 & \cdots & k & k+1 & \cdots & n \\ \mu_1 & \cdots & \mu_k & \nu_1 & \cdots & \nu_{n-k} \end{pmatrix} \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^{\mu_a}, \theta^{\mu_a} \rangle \right) \theta^{\nu_1} \wedge \cdots \wedge \theta^{\nu_{n-k}}$$

であるから,  $\omega_p \wedge \star\eta_p \neq 0$ なのは  $\{1, \dots, k\} = \{\mu_1, \dots, \mu_k\}$  の場合のみである. このとき

$$\omega_p \wedge \star\eta_p = \text{sgn} \begin{pmatrix} 1 & \cdots & k \\ \mu_1 & \cdots & \mu_k \end{pmatrix} \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^n$$

である. 一方,  $\langle \omega_p, \eta_p \rangle \neq 0$  となるのは  $\{1, \dots, k\} = \{\mu_1, \dots, \mu_k\}$  の場合のみであり,

$$\langle \omega_p, \eta_p \rangle = \det(\langle \theta^i, \theta^{\mu_j} \rangle) = \text{sgn} \begin{pmatrix} 1 & \cdots & k \\ \mu_1 & \cdots & \mu_k \end{pmatrix} \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right)$$

となる. 同様の議論により  $\omega \wedge \star\eta = \eta \wedge \star\omega = \langle \omega, \eta \rangle \text{vol}_M$  とわかる.

(4)  $\star \text{vol}_M = 1$  と (3) より従う.

(5) (2), (4) より

$$\langle \star \omega, \star \eta \rangle = \star(\star \omega \wedge \star \star \eta) = (-1)^{j+k(n-k)} \star(\star \omega \wedge \eta) = (-1)^j \star(\eta \wedge \star \omega) = (-1)^j \langle \omega, \eta \rangle$$

性質 (3) を  $\star$  の定義とすることもできる. その場合, 「性質 (3)  $\implies$  定義 5.5」は次のようにして示される:

**証明**  $M$  の各点  $p$  において示せば良い.  $\{\theta^i\}$  を正規直交標構として  $\omega_p = \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k$  とおくと, 性質 (3) より

$$\begin{aligned} \omega_p \wedge \star \omega_p &= (\theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k) \wedge \star(\theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k) \\ &= \det(\langle \theta^\mu, \theta^\nu \rangle_k) \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^n \\ &= \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^n. \end{aligned}$$

したがって

$$\star(\theta^1 \wedge \cdots \wedge \theta^k) = \left( \prod_{a=1}^k \langle \theta^a, \theta^a \rangle \right) \theta^{k+1} \wedge \cdots \wedge \theta^n$$

#### 5.4.1 双対基底への作用

命題 5.2 と命題 5.3-(3) を用いると

$$\begin{aligned} &(\text{d}x^1 \wedge \cdots \wedge \text{d}x^k) \wedge \star(\text{d}x^1 \wedge \cdots \wedge \text{d}x^k) \\ &= \det(\langle \text{d}x^\mu, \text{d}x^\nu \rangle_{1 \leq \mu, \nu \leq k}) \sqrt{|\det(g_{\kappa\lambda})|} \text{d}x^1 \wedge \cdots \wedge \text{d}x^n \\ &= \det(g^{\mu\nu})_{1 \leq \mu, \nu \leq k} \sqrt{|\det(g_{\kappa\lambda})|} \text{d}x^1 \wedge \cdots \wedge \text{d}x^n \end{aligned}$$

なので,  $g := \det(g_{\kappa\lambda})$  とおいて

$$\begin{aligned} \star(\text{d}x^1 \wedge \cdots \wedge \text{d}x^k) &= \det(g^{\mu\nu})_{1 \leq \mu, \nu \leq k} \sqrt{|g|} \text{d}x^{k+1} \wedge \cdots \wedge \text{d}x^n \\ &= \sqrt{|g|} \epsilon_{\mu_1 \dots \mu_k} g^{\mu_1 1} \cdots g^{\mu_k k} \text{d}x^{k+1} \wedge \cdots \wedge \text{d}x^n \\ &= \frac{\sqrt{|g|}}{(n-k)!} \epsilon^{1 \dots k}_{\nu_{k+1} \dots \nu_n} \text{d}x^{\nu_{k+1}} \wedge \cdots \wedge \text{d}x^{\nu_n}. \end{aligned}$$

ただし 2 番目の等号において, 添字  $\{\nu_{k+1}, \dots, \nu_n\}$  に関する和をとるようにしたことで重複する項が  $(n-k)!$  個出現するため,  $(n-k)!$  で全体を割っている.  $\{1, \dots, k\}$  の順番を入れ替えることで

$$\star(\text{d}x^{\mu_1} \wedge \cdots \wedge \text{d}x^{\mu_k}) = \frac{\sqrt{|g|}}{(n-k)!} \epsilon^{\mu_1 \dots \mu_k}_{\nu_{k+1} \dots \nu_n} \text{d}x^{\nu_{k+1}} \wedge \cdots \wedge \text{d}x^{\nu_n}$$

である.

## 5.5 ラプラシアンと調和形式

この節では、 $M$  は指数  $(i, j)$  の計量  $g$  を持った向き付けられた多様体で、コンパクトかつ境界のないものとする。コンパクト性は  $\Omega^k(M)$  に内積 5.6 を入れて計量線型空間にする場合にのみ必要となる。

### 定義 5.6: $k$ -形式の内積その 2

$k$ -形式全体が作る無限次元ベクトル空間  $\Omega^k(M)$  上の非退化内積  $(\cdot, \cdot) : \Omega^k(M) \times \Omega^k(M) \rightarrow \mathbb{R}$  を次のように定義する：

$$(\omega, \eta) := \int_M \langle \omega, \eta \rangle_k \text{vol}_M$$

特に  $M$  が Riemann 多様体ならば内積  $(\cdot, \cdot)$  は正定値内積である。

**証明** 非退化（正定値）内積の公理 5.1-(I1), (I2), (I3') ((I3)) を満たすことを確認すれば良い。 ■

命題 5.3-(3) より

$$(\omega, \eta) = \int_M \omega \wedge \star \eta = \int_M \eta \wedge \star \omega$$

とも書ける。

### 5.5.1 随伴外微分作用素

#### 定義 5.7: 随伴外微分作用素

外微分作用素

$$d : \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^{k+1}(M)$$

に対して、随伴外微分作用素

$$\delta : \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^{k-1}(M)$$

を次のように定義する：

$$\delta := (-1)^k \star^{-1} \circ d \circ \star = (-1)^{j+n(k+1)+1} \star \circ d \circ \star$$

#### 命題 5.4: 随伴性

$C^\infty(M)$ -加群  $\Omega^k(M)$  に定義 5.6 の内積  $(\cdot, \cdot)$  を入れて計量線型空間にしたとき、 $\delta$  は  $d$  の随伴作用素（定義 5.1）である：

$$(d\omega, \eta) = (\omega, \delta\eta), \quad \forall \omega \in \Omega^k(M), \forall \eta \in \Omega^{k+1}(M)$$

### 証明

$$d\omega \wedge \star \eta = d(\omega \wedge \star \eta) - (-1)^k \omega \wedge d(\star \eta) = d\omega \wedge \star \eta + \omega \wedge \star(d\eta)$$

両辺を  $M$  上で積分して Stokes の定理を用いると,  $M$  に境界がないことから

$$(d\omega, \eta) = \int_M d\omega \wedge \star \eta + \int_M \omega \wedge \star d\eta = (\omega, \delta \eta).$$

■

#### 命題 5.5:

- (1)  $\star \delta = (-1)^k d \star$
- (2)  $\delta \star = (-1)^{k+1} \star d$
- (3)  $\delta \circ \delta = 0$

**証明** (1)  $\star \delta = \star \circ (-1)^k \star^{-1} \circ d \circ \star = (-1)^k d \star$ .

(2)  $\delta \star = (-1)^{j+n(n-k+1)+1} d \circ \star \circ \star = (-1)^{j+n(n-k+1)+1} (-1)^{j+(n-k)k} \star \circ d \circ \star^{-1} \circ \star = (-1)^{k+1} \star d$ .

(3)  $\delta \circ \delta = (-1)^{k-1} \star^{-1} \circ d \circ \star \circ (-1)^k \star^{-1} \circ d \circ \star = -\star^{-1} \circ d \circ d \circ \star = 0$ .

■

## 5.5.2 Laplacian

#### 定義 5.8: Laplacian

線型作用素

$$\Delta := d\delta + \delta d : \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^k(M)$$

はラプラシアン (Laplacian) もしくは **Laplace-Beltrami 作用素** (Laplace-Beltrami operator) と呼ばれる.

また,

$$\Delta \omega = 0$$

となる微分形式  $\omega \in \Omega^*(M)$  を**調和形式** (harmonic form) と呼ぶ.

#### 命題 5.6: Laplacian の性質

- (1)  $\star \Delta = \Delta \star$ . i.e.  $\omega$  が調和形式  $\implies \star \omega$  も調和形式
- (2)  $\forall \omega, \eta \in \Omega^k(M)$  に対して  $(\Delta \omega, \eta) = (\omega, \Delta \eta)$ . i.e.  $\Delta$  はエルミート作用素である.
- (3)  $M$  が Riemann 多様体ならば,  $\Delta \omega = 0 \iff d\omega = 0, \delta \omega = 0$

**証明** (1) 命題 5.5-(1), (2) より

$$\star \Delta = (-1)^{k+1} \delta \star \delta + (-1)^k d \star d = \delta d \star + d \delta \star = \Delta \star.$$

(2) 命題 5.4 と内積の対称性より

$$\begin{aligned}
 (\Delta\omega, \eta) &= (d\delta\omega, \eta) + (\eta, \delta d\omega) \\
 &= (\delta\omega, \delta\eta) + (d\eta, d\omega) \\
 &= (d\delta\eta, \omega) + (\omega, \delta d\eta) \\
 &= (\omega, \Delta\eta).
 \end{aligned} \tag{5.5.1}$$

(3)  $(\Leftarrow)$  は明らか.

$(\Rightarrow)$   $M$  が Riemann 多様体であるという仮定から, 内積  $(\cdot, \cdot)$  は正定値である. 式 (5.5.1) より

$$(\Delta\omega, \omega) = (\delta\omega, \delta\omega) + (d\omega, d\omega)$$

であるから, 内積の正定値性から  $\Delta\omega = 0$  ならば  $\delta\omega = d\omega = 0$  である. ■

### 5.5.3 Hodge の定理

この節では,  $M$  は向き付けられたコンパクト Riemann 多様体で境界がないものとする.

$M$  上の調和  $k$ -形式全体の集合を

$$\text{Harm}^k(M) := \{\omega \in \Omega^k(M) \mid \Delta\omega = 0\}$$

と書く. 命題 5.6-(3) により調和形式は必ず閉形式なので

$$\text{Harm}^k(M) \subset \text{Ker}(d : \Omega^k(M) \rightarrow \Omega^{k+1}(M))$$

であり, 後述の de Rham コホモロジー類  $H_{\text{DR}}^k(M)$  への写像が自然に誘導される:

$$\pi : \text{Harm}^k(M) \rightarrow H_{\text{DR}}^k(M), \omega \mapsto [\omega]$$

$\omega \in \text{Harm}^k(M)$  が完全形式である, i.e.  $\exists \eta \in \Omega^{k-1}, \omega = d\eta$  ならば

$$(\omega, \omega) = (d\eta, \omega) = (\eta, \delta\omega) = 0. \implies \omega = 0.$$

であることから,  $\pi$  は単射であるとわかる. 実は, 次の事実が知られている:

#### 定理 5.1: Hodge の定理

自然な写像  $\pi : \text{Harm}^k(M) \rightarrow H_{\text{DR}}^k(M)$  は同型写像である. i.e. 向き付けられたコンパクト Riemann 多様体の任意の de Rham コホモロジー類は, ただ一つの調和形式で代表される.

定理 5.1 の証明には, 次の定理が有用である:

#### 定理 5.2: Hodge 分解

向き付けられたコンパクト Riemann 多様体の任意の  $k$ -形式は, 調和形式, 完全形式, 双対完全形式の和として一意に分解される:

$$\Omega^k(M) = \text{Harm}^k(M) \oplus d\Omega^{k-1}(M) \oplus \delta\Omega^{k+1}(M)$$